

学ぶって何だろう？

何 楊（筑波大学大学院／生涯学習・社会教育学）

誰も知らない

～ Nobody Knows ～

- ◆ 種別：DVD（映画）
- ◆ 監督／脚本：是枝 裕和
- ◆ 製作年：2004 年
- ◆ 製作国：日本
- ◆ 発売／販売元：バンダイビジュアル株式会社
- ◆ 税込価格：3,990 円
- ◆ 時間：本編 141 分
- ◆ 音声：日本語
- ◆ 字幕：日本語、英語



©「誰も知らない」製作委員会

あらすじ

都内のアパートに、スーツケースを抱えた母親のけい子と息子の明が引越してくる。アパートの大家には「主人が長期出張中の親子 2 人だ」と挨拶するが、実はスーツケースの中には次男の茂、次女のゆきが入っていた。その後、長女の京子もこっそりアパートにたどり着く。けい子は、大家にも周辺住民にも事がばれないように子どもたちに厳しく注意する。子どもたちはそれぞれ父親が違う上、出生届すら出されておらず、大家には小学校の 6 年生だと説明された明でさえも学校に通ったことがない。間もなく、けい子に恋人ができ留守がちになる。仕舞いには生活費を現金書留で渡すだけでほとんど帰宅しなくなってしまう。そこから兄弟だけの、誰も知らない悲惨な生活が始まる…。

シーン再現

<明と母けい子のミスタードーナツでの会話>

明：あのさ、前から言ってると思うけどさ、いつになったら学校行かしてもらえんの？

けい子：学校、学校っていいじゃん別に行かなくたって。学校なんか出なくたって偉くなった人いっぱいいるでしょ。

明：誰だよ？ …だいたいお母さん勝手なんだよ。

けい子：何よ、その言い方。勝手って誰が一番勝手なの？ あんたのお父さん一番勝手じゃないのよ。一人でいなくなって。何なのよ、あたしは幸せになっちゃいけないの！ … あっ、いた偉くなった人、田中角栄…知らないか。

Chapter	
1. 引越し／9'55	
2. 出勤／10'00	
3. 家出／10'44	
4. コンビニ／11'21	
5. 帰宅／9'02	
6. 待ちぼうけ／8'04	
7. お年玉／8'09	
8. 野球／3'43	
9. ゲームセンター／7'22	
10. 中学校／14'07	
11. 公園／5'47	
12. デート／2'55	
13. おにぎり／9'54	
14. ケンカ／9'15	
15. 翌朝／11'02	
16. 夜明け／9'30	

明：知らない。

けい子：古いか、あれは？ アンтониオ猪木とか行ってないでしょ、きっと。分かんないけど。

教育学の視点から

好きでもない教科を学び、一方的に決められた校則を守る。そんな学校へ、なぜ行かなければならないのだろう。学校は何のためにあるのだろうか。日本では義務教育のみならず、就学義務のない高等学校などの後期中等教育機関への進学率さえも定時制・通信制を含めると98%以上であり、多くの子どもたちは当たり前のように日々学校に通っている。「学校に行かないとどうなるの？」そんな疑問に対して、本映画は答えを与えてくれるかもしれない。

主人公の明は、就学年齢になっても学校に行かせてもらえなかった。母親は無責任にも恋人との遊びに夢中で、ほとんど家にいない。明はそんな中、荒れ果てていった。ろくな友達もいなく、不規則な生活を繰り返す日々。何が正しく、何が間違いなのか教える導く人がいない。明は、人間の本能のまま生きていく。

学校は勉強だけでなく、ルールを守ること、集団生活の中で生きる知恵を教えられる。学校とは、小さな社会なのである。人は常に学び、本能とは別な理性を築く必要がある。そのためにも、学校教育の役割は大きい。その学校教育を受けさせず、また家庭においても教育しない状況は、子どもの虐待としか言いようがない。

人間の教育は家庭教育から始まるといっても過言ではない。親は、人生で最初の先生でもある。我々は、親から言葉を学び、歩き方、物の食べ方等、生きていく上で必要不可欠なたくさんを学ぶ。子を見れば親が分かると言われるように、子は親の鏡なのである。子どもの人間形成において、家庭教育はその後の教育段階よりも大きな影響を及ぼすのであり、とりわけ重要であるといえる。

現在も、無力な子どもに対する虐待問題が後を絶たない。子どもを産むことの重さや正しい育児方法を知らないことは、親にも責任はある。しかし、そのような親をつくり上げているのはこの社会であり、教育である。このような教育は、学校教育だけでなく、社会教育も大きな担い手となる。社会教育は学校の教育課程外の「主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動」と定義される。育児・出産に関する相談のできる場所づくりや講座、育児者同士の交流の場など、子育てをサポートする社会教育の役割は大きい。フォーマルな学校教育とインフォーマルな社会教育における学習は、子どもと親の成長を支える重要な柱である。

命の尊さ、育児の責任や重要さとともに、「学校って何だろう？」、「教育って何だろう？」と改めて考えさせられる作品である。

学
べ
る
こ
と
に
感
謝
を
！

Information

※本作品は、1988年に発生した巣鴨子供置き去り事件を題材として、是枝裕和監督が15年にもわたる構想の末、映像化したものである。国内外の映画賞を多数獲得した、2004年度の日本映画における最も高い評価を得た作品の一つである。

【参考文献】 荻谷剛彦『学校って何だろう—教育の社会学入門』筑摩書房、2005年